



TITLE:

民族的自覺ト植民地土民ノ教育

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 民族的自覺ト植民地土民ノ教育. 經濟論叢 1916, 2(2): 197-211

ISSUE DATE:

1916-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/126962>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

經濟論叢

號二第

卷二第

論說

●戸數割及戸別割ヲ論ズ

法學博士 神戸 正雄

●戦後ノ米國ニ於ケル歐洲移民運動ト日本移民問題(一)

講師 米田庄太郎

●民族の自覺ト植民地土民ノ教育

助教授 山本美越乃

研究

●不換紙幣ノ價格ニ就テ

法學博士 戸田 海市

●大藏省證券ノ割引歩合ニ就テ

法學士 三木 純吉

●保險學說ノ發展(二完)

法學士 小島昌太郎

雜錄

●中田公直氏遺著「佐藤信淵ノ農政學說」

同志社大學教授 瀧本 誠一

●米ノ生産費ニ就テ

助教授 河田 嗣郎

●商業道德ト時勢ノ變

法學博士 神戶 正雄

●家庭ニ關スル新統計調査例

教授 財部 靜治

●中歐經濟同盟說ニ就テ

法學博士 小川 郷太郎

●幼兒死亡ト貧困

法學博士 河上 肇

●米國ニ於ケル各國移民ノ消長

助教授 山本美越乃

●小國ノ將來

講師 高田 保馬

●紹介——祖國ヲ顧ミテ(河上博士著)孤立國(谷井法學士譯)蘇峰文選(德富猪一郎著)

民族的自覺ト植民地土民ノ教育

助教授 山本美越乃

- (一) 民族的自覺ノ大勢
- (二) 植民地土民ノ教育ト民族的自覺ノ關係
- (三) 植民地ノ土民ニ對スル教育方針
- (四) 放資植民地ト民族的自覺問題
- (五) 我が植民地ノ將來

一

民族的自覺ハ獨リ植民地ノミニ關スル問題ニ非ラズ、又必ラズシモ近世ノ社會ニ於ケル特殊ノ現象ニモ非ラズシテ、苟クモ同一民族ガ互ニ相團結シテ自己ヲ中心トセル政治的社會的又ハ經濟的發展ヲ企劃セントスル場合ニハ、時ト處トニ論無ク、常ニ之ガ發露ヲ見ルハ史上其ノ實例ニ乏シカラズ。然レドモ同一民族ガ互ニ協力シテ一ノ國家又ハ社會ヲ組織セル場合即チ單純民族國ノ場合ニ於テハ、民族的自覺ノ發動ハ國政上ニ困難ナル問題ヲ生ゼシムルコト稀ナリト雖ドモ、近世ノ國家ノ如ク密ニ内ニ在リテ異民族ヲ統一糾合シテ一大帝國ヲ建設センコトニ努ムルノミナラズ、更ニ外ニ向テ領土ヲ擴張スルコトニ依リテ所謂世界の又ハ植民的

大帝國 (Weltmacht oder Kolonialmacht) ラ實現セシメンコトニ汲々タル時代ニ在リテハ、貧弱ナル一小國トシテ孤立的ノ存在ヲ保ツニ非ラザル限リハ、單純民族國ハ漸次強國ノ爲メニ併合セラルルカ、或ハ互ニ聯合シテ茲ニ複雑民族國ヲ現出スルニ至ルハ自然ノ勢ニシテ、既ニ同一國內ニ異種ノ民族ヲ包括スル時ハ是等ノ異民族間ニ於ケル自覺心ノ發動ハ、往々國政上ニ困難ナル問題ヲ惹起セシムルノ原因トナルコトアリ。殊ニ同一國內ニ併存セル各民族間ニ著シク勢力ノ均衡ヲ失シ、例ヘバ治者被治者等ノ別ヲ生ズルガ如キ場合ニハ、後者ノ地位ニ置カレタル者ハ成ルベク速カニ前者ノ羈絆ヲ脱セントシ、彼等ノ間ニ於ケル民族の自覺ハ終ニ獨立運動トシテ體現セラルルニ至ルコト決シテ稀ナリトセズ、彼ノ愛蘭民族ノ英國ニ對シ、或ハ波蘭民族ノ獨逸露等ニ對スル獨立の運動ノ如キハ即チ之レニ屬ス。(註)

現今世界ニ於ケル強國ハ其ノ程度ニ於テハ多少ノ差異アルモ、孰レモ複雑民族國タルノ性質ヲ有スルガ故ニ、國內ニ統一セラレタル異民族ノ漸次社會上及ビ經濟上ニ一勢力ヲ形造ルニ從ヒ、諸種ノ困難ナル政治上ノ問題ヲ惹起セシムルノ虞レ甚ダ多クシテ、異民族間ニ於ケル民族の自覺ノ發動ハ茲ニ民族のノ競爭ヲ生ミ、民族のノ競爭ハ更ニ其ノ必然ノ結果トシテ獨立分離ノ問題ヲ生ゼシムルニ至ル。

(註) 此問題ニ關シテハ Gumpowicz, Der Rassenkampf, S. 324 ff. ハ參考ニ値ス

然カモ斯カル傾向ハ畜ニ一國ノ内部ニ於テノミナラズ植民地ニ於テモ亦同一ニシテ、即チ植民地土民ノ數ニシテ極メテ僅少ナルカ、或ハ其ノ文化ノ程度未ダ甚ダ幼稚ナル時代ニ在リテハ、之レガ統治ハ左迄困難ナル問題ニ非ラズト雖ドモ、母國ノ移住民ニ比シテ植民地土民ノ數頗ル多キカ、或ハ又其ノ文化ノ程度ニ著シキ懸隔無キニ至ル時ハ、早晚土民間ニ發現スベキ民族的自覺ハ終ニ植民地ノ獨立運動ヲ誘フノ危險アルガ故ニ、統治上困難ナル幾多ノ問題ヲ續出スルニ至ルハ免ル能ハザル所ナリトス。殊ニ嘗テ一ト度固有ノ文化ヲ有シタル地方ニ於テハ、民族的自覺ノ發現モ亦比較的速カナルヲ以テ、斯カル地方ヲ植民地トナス場合ニハ頗有後久シカラズシテ此ノ種ノ問題ニ逢着スルノ機會甚ダ多シ、印度及ビ埃及ニ於ケル實例ハ之レヲ證シテ餘リアリ。

此ノ如ク國內ニ於テモ亦植民地ニ於テモ、民族的自覺ハ今ヤ一種ノ風潮トシテ人心ヲ支配スルニ至レル原因ハ固ヨリ一ニシテ足ラズト雖ドモ、就中其ノ最モ重大ナル原因ヲ成セルモノハ近世各國ニ於ケル教育ノ普及及ビ人類ノ平等ヲ基礎トセル宗教的思想ノ感化ニ在リト言ハザル可カラズ。

國內ニ於ケル異民族ノ軋轢ガ其ノ國政上ニ及ボス障礙ノ如キハ、我が國ニ於テ

ハ殆ンド問題ト成ラザルヲ以テ姑ラク之レヲ措キ、植民地ニ於ケル土民ノ民族の自覺ノ問題ニ就キテ考察スルニ、凡ソ一切ノ民族ハ其ノ程度ニ關シテハ強弱ノ差異アルモ、必ラズ或種ノ自信力ヲ有シ、是等ノ自信力ハ文化ノ程度未ダ幼稚ナル時代ニ在リテハ極メテ薄弱ナリト雖ドモ、一面ニ於テハ教育ノ普及ニ因リ、他面ニ於テハ人類ノ平等ヲ基礎トセル宗教的思想ノ感化ニ因リテ徐々ニ向上發展シ、斯クシテ彼等ノ智識能力及ビ信念等ノ進歩ト共ニ益々自信力ヲ鞏固ナラシメ、終ニ他民族ニ對スル自己ノ地位ヲ覺認スルニ至ルモノニシテ、斯カル民族のノ自覺ニシテ其ノ最高潮ニ達シタル場合ニハ、或ハ解放問題トナリ或ハ獨立運動トシテ外ニ現ハルルニ至ル。此ノ如ク民族のノ自覺ハ元ト是レ人類自然ノ本能性ニ出ヅルモノナルガ故ニ、漫リニ他ヨリ之レヲ抑壓セントスルモ到底其ノ目的ヲ達シ得ベキニ非ラズ。

二

植民地ノ經濟的發展ヲ計ルト共ニ又其ノ社會的狀態ヲ改善セント欲セバ、植民地土民ノ教化ハ最先ノ急務ニシテ、從來各國ノ植民政策上ニ於テ土民教育問題ノ極メテ重要視セラレツツアル所以ノモノハ、斯カル根本のノ理由アルニ基ヅク。然

レドモ之レヲ過去ノ實驗ニ徴スル時ハ土民ニ對スル教育ノ效果ハ往々ニシテ豫期ニ反シ、之レガ爲メニ却テ人類ノ本能性トシテ各國々民ノ盛衰興亡ノ一大原因ヲ成セル民族的自覺心ヲ奮起セシメ、小ニシテハ植民地内ニ於ケル母子兩國民間ノ不斷ノ衝突トナリ、大ニシテハ終ニ植民地獨立運動ノ萌芽ヲ茲ニ發セシムルコトナシトセズ、彼ノ印度ノ英國ニ對シ、比律賓ノ米國ニ對シ、印度支那ノ佛國ニ對シテ往々不穩ノ行動ニ出デントスルガ如キハ、其ノ原因固ヨリ單純ナラズト雖ドモ、泰西ノ教育制度ヲ移シテ直チニ土民ヲ教化セントシタル過去ノ政策ガ却テ彼等ノ自覺心ヲ刺戟シ、終ニ母國ノ干涉ヲ排セントスルノ決心ヲ促サシムルニ至レルコトハ之レヲ疑フ可カラズ。(註一)嘗テ印度及ビ埃及ノ統治ニ其ノ半生ヲ捧ゲ、植民地問題ニ關シテハ幾多ノ實驗ヲ有セルくろゝまゝ卿ガ、植民地ニ於ケル母國ノ教育主義ニシテ宜シキヲ得ザル時ハ、之レガ爲メニ却テ母子兩國ノ分離ヲ誘フニ至ルノ虞レアルベキヲ道破シテ

“The great proficiency in some European language often acquired by individuals amongst the subject races of the modern Imperial Powers in no way tends to inspire political sympathy with the people to whom that language is their mother tongue Indeed, in some ways, it rather tends to disruption, inasmuch as it furnishes the subject races with a very powerful arm against their alien rulers.” (註二)

(註一) Austin, Colonial Administration, pp. 2684-85.
Reinsch, Colonial Administration, pp. 38-58.
Moses, Education in Philippine Islands (Intern. Qu., March, 1904).
(註二) Cromer, Ancient and modern Imperialism, pp. 106-7.

ト云ヘルハ蓋シ至言ト謂ハザルベカラズ、果シテ然リトセバ植民地土民ノ教育問題ハ將來ノ植民政策上ニ於ケル一大難問ト稱セザルヲ得ズ。

前世紀ノ中葉ニ至ル迄ハ歐洲ニ於ケル植民國ハ孰レモ遠カラズシテ植民地ハ遂ニ獨立スルニ至ルベキ時機アルコトヲ豫想シ、當時ノ爲政者及ビ學者等モ亦植民地ノ永久的領有ノ利益ヲ疑ヒ、却テ其ノ獨立分離ヲ慫慂セントスルガ如キ風アリシヲ以テ、例ヘバ英國ニ於テハ Russel, Stanley, Cobden, Bright, Disraeli 等ノ如キ、佛國ニ於テハ Turgot, Say, Passy, Guyot 等ノ如キハ其ノ代表者ニシテ、就中 "Colonies are like fruit which, when ripe, fall off from the parent branch." トノちゆるゴーノ言ハ現今ニ至ルモ尙ホ人口ニ膾炙セル所ナリトス(註)斯カル時代ニ在リテハ民族の自覺心ヲ刺戟スルガ如キ土民ノ教育方法ハ寧ロ其ノ要求ニ適シ、此ノ如クニシテ初メテ母國ハ成ルベク速カニ植民地ヲシテ獨立的ノ生活ニ入ラシムルコトヲ得ベキガ故ニ、植民地土民ノ教育問題ニ關シテハ議論ヲ生ズベキ餘地少ナカリシト雖ドモ、前世紀ノ中葉以後獨逸伊太利等ノ建國ニ次デ歐洲諸國ニ於ケル一般の形勢ノ推移ト共ニ、母國ノ植民地ニ對スル思想モ亦著シキ變化ヲ來タシ、殊ニ人口ノ増加及ビ資本ノ膨脹ハ、母國對植民地間ノ關係ヲ益々密接鞏固ナラシムルノ必要ヲ生ゼシメ

(註) Egerton, Origin and Growth of the English Colonies and of their System of Government, p. 16.
Reinsch, Colonial Government, pp. 4-9.

タル現今ノ時代ニ在リテハ、過度ニ土民ノ民族の自覺心ヲ刺戟シ、延テ其ノ獨立運動ヲ誘フニ至ルガ如キ教育方法ハ、植民地領有ノ本來ノ目的ト相容レザルモノト云ハザル可カラズ。

三

凡ソ植民地ノ土民ニ對シテ教育ヲ施ス主タル目的ハ、彼等ヲシテ眞ニ其ノ生存ノ意義ヲ理解セシムルト共ニ、又能ク時勢ニ適應シ且其ノ社會狀態ト調和ス可キ活動ノ素地ヲ作ラシメントスルニ在リ。故ニ植民地ニ於ケル土民ノ教育制度ノ確立ニハ必ラズ其ノ社會的事情及ビ民族の傾向ノ研究ヲ先行要件トナシ、是等ノ研究ヲ基礎トシテ其ノ上ニ建設セラレザル可カラズ、一民族ニ適當セル教育制度常ニ必ラズシモ他ノ民族ニ適セリト稱スルヲ得ザルガ故ニ、如何ニ植民地土民ヲ教育ス可キヤヲ決定スルニ先ダテ、彼等ハ果シテ如何ナル教育ヲ要ス可キヤヲ慎重ニ攻究セザル可カラズ。複雑進歩セル母國民ノ心理的狀態ニ適合セル教育制度ヲ、單純幼稚ナル植民地ニ移シテ直チニ之レヲ土民ニ適用セントスルガ如キハ、單ニ彼等ニ文明的ノ知識ヲ注入スルノ目的ヨリセバ兎ニ角、之レニ依リテ土民教化ノ實ヲ擧グルコトハ殆ンド不可能ニ屬ス。

加之植民地ノ土民ニ對スル教育制度ノ決定ニハ、又其ノ經濟的要求ニ深ク注意スルノ必要アリ、直接植民地ノ經濟的事情ト交渉ヲ有セザル教育制度ハ、如何ニ理想のノモノト雖ドモ植民地ニ於テハ畢竟有害無益ニシテ、徒ラニ土民ヲ空想ニ導キ其ノ極却テ社會的秩序ヲ紊ルニ至ルノ危險アリ、埃及びゆるま、錫蘭南部及ビ中部亞弗利加・ジャマイカ等ニ於ケル土民ニ對スル過去ノ文藝的教育ハ、歐洲人ノ以テ理想的教育トナセル所ナルベシト雖ドモ、其ノ結果ハ左ナキダニ本來勞働ヲ好マザル土民等ヲシテ益々勞働ヲ嫌忌スルノ念ヲ生ゼシメ、産業上ノ開發ノ如キハ棄テテ之レヲ顧ミズシテ、唯徒ラニ空想ニノミ耽溺セントスル一種ノ遊民ヲ増加セシメ、遂ニ社會上ニ幾多ノ弊竇ヲ流布スルノ原因トナルニ至レルコトハ、以テ後進植民國ノ參考トナスニ足ル。(註)

觀察經驗ヲ基礎トスルニ非ラズシテ、主トシテ思索ニ依ラシメントスルガ如キ土民ノ智識ノ啓發方法ハ、往々現實ノ社會狀態及ビ經濟的事情ヲ無視シテ容易ニ達シ得ベカラザル理想ニノミ馳セシメ、一朝其ノ理想ヲ實現スルコト能ハザルヲ悟ルヤ、教育ニ依リテ刺戟セラレタル彼等ノ自覺心ハ、却テ母國ニ對スル反噬ノ利器トシテ惡用セラ、ルルニ至ルコト稀ナリトセザルガ故ニ、斯カル教育方法ハ未ダ

(註) Reinsch, Colonial Administration, pp. 49-51.

以テ完全ナリト謂フヲ得ズ。植民地ニ於ケル土民ノ教育ハ如何ナル場合ニ於テモ必ラズ其ノ社會狀態及ビ經濟的事情ニ適應セシムルコトヲ以テ最大眼目ト爲サザル可カラズ、若シ然ラザル時ハ教育ニ因ル土民ノ向上心ノ發展ハ、寧ロ危險ナル革命的ノ運動ヲ助成セシムルノ原因トナルニ過ギズ、⁵を⁶れすノ韃靼人ニ對スル批評 "Hitherto the spread of education among the Tartars has tended rather to imbue them with fanaticism." (註)ハ獨リ宗教的ノ熱狂心ニ富メル該民族ノミノ特質ニ非ラザルナリ。

要之民族の自覺ト植民地土民ノ教育問題ヲ調和セシメント欲セバ、先ヅ土民ノ性向及ビ彼等ノ社會ニ於ケル固有ノ制度ヲ研究シ、其ノ性向及ビ社會的制度ヲ根本的ニ破壊セザル範圍ニ於テ、徐々ニ植民地ノ經濟的發展ヲ遂ゲシムルニ必要ナル教育ヲ土民ニ授クルコトニ注意セザル可カラズ。

既ニ述ベタルガ如ク民族の自覺ハ人類自然ノ本能性ニ基ヅクモノナルガ故ニ、假令如上ノ方針ニ依リテ土民ニ教育ヲ授クルモ、絶對的ニ其ノ自覺心ノ發動ヲ抑制スルコトハ到底不可能ニシテ、相當ノ教育ヲ受クル時ハ更ニ進ンデ高等ノ知識ヲ要求セントシ、加フルニ一般社會ノ進歩及ビ交通機關ノ發達ニ伴フ外部的ノ刺激ハ、早晚土民間ニ民族の自覺ヲ奮起セシムルニ至ルベキハ免ル能ハザル所ニシ

(註) Wallace, Russia, vol. I., p. 204.

テしやいゑ氏ガ土民ニ對シテ一度知識ノ門戸ヲ開ク時ハ之レヲシテ一定ノ程度ニ止メシムルコト難ク益々進ンデ其ノ師ト拮抗セントスルニ至ルベク、土民ノ狀態此ノ域ニ達スル時ハ終ニ他國ノ支配ヲ受クルヲ潔ヨシトセザルニ至ル」(註ト云ヘルハ、植民地土民ノ心理的傾向ヲ描寫シテ殆ンド餘ス所ナシト雖ドモ、是等ノ民族的自覺ヲシテ常ニ植民地ノ經濟的發展ノ目的ニ向テ善用セシムルカ、或ハ然ラズシテ母國ニ對スル反抗的ノ運動ニ惡用セシムルカハ、一ニ過去ニ於ケル土民ノ教化指導方法ノ如何、換言セバ植民地ニ對スル母國ノ教育政策ノ如何ニ依リテ決セラルト言フモ不可ナシ。斯カル觀點ヨリセバ從來屢々論議セラレタル植民地ニ於ケル母國語教育主義ノ可否如何ノ如キハ未ダ以テ重大ナル問題トナスニ足ラズト信ズ、固ヨリ母國人ニトリテハ自ラ土語ヲ習得センヨリモ、植民地ノ土民ヲシテ母國語ヲ學バシムルノ簡便ナルニ如カズト雖ドモ、凡ソ國語ハ一面ニ於テハ其ノ國民ノ思想ヲ代表スルモノナルガ故ニ、母國語教育ノ移入ハ又之レト共ニ母國民ノ思想ヲ移入スルノ結果ヲ生ズルハ當然ニシテ、斯カル場合ニ若シ植民地ノ文化ニシテ未ダ母國民ノ思想ヲ消化シ吸收シ得ベキ程度ニ達セザル時ハ、最初ヨリ母子兩國民間ニ意志ノ疎隔ヲ生ジ、之レガ爲メニ却テ教育ノ效果ヲ鈍カラシムルノ

(註) Chailley, Administrative Problems of British India, pp. 478-79.

虞レナシトセズ、故ニ母國語教育主義ヲ以テ如何ナル場合ニ於テモ常ニ最善ノ方法ナリトハ稱スルヲ得ザルベシ。(註)要ハ其ノ母國語ニ依ルト植民地ノ土語ニ依ルトヲ問ハズ、成ルベク速カニ植民地ノ經濟的發展ノ目的ヲ達スルニ必要ナル教育ヲ土民ニ授クルト共ニ、又彼等ヲシテ此ノ目的ヲ達セント欲セバ母子兩國ノ不斷ノ提携協力ニ俟タザル可カラザル所以ヲ知ラシムルコトヲ以テ最大急務トナス。

九

通商又ハ軍事ノ根據地タルベキ植民地 (Comptoirs de commerce ou points d'appui) ハ、之レヲ別トシ、普通生産的ノ植民地ハ母國人ノ居住ニ適スベキヤ否ヤヲ標準トシテ、之レヲ移住植民地(狹義ノ農業植民地) (Agricultural or Settlement Colonies; Ackerbau-od. Siedelungs-od. Plantations Colonies; Colonies agricoles ordinaires ou de peuplement) 及ビ放資植民地(採收植民地) (Exploitation or Investment Colonies; Pflanzungs-od. Plantations Colonies; Colonies de plantation ou d'exploitation) ニ大別スルコトヲ得ベシト雖ドモ、山來放資植民地ハ其ノ性質上母國ニトリテハ決シテ安全ナル植民地ト稱スルヲ得ザルモノアリ、蓋シ此ノ種ノ植民地ハ氣候風土其ノ他諸種ノ自然的事情ノ障礙ノ爲メニ母國人ノ移住ニ適セザルカ、或ハ又植民地土民ノ數多キヨリ殆ンド移住ノ餘地無キガ如キ場合ニ、主トシテ資本ヲ放下シテ該地方ニ於ケル特殊ノ富源ヲ開發利用セントスルヨリ起ルモノナルモ、之レヲ民族的の自

(註) Lewis, Essay on the Government of Dependencies, pp. 267-9.
Reinsch, Colonial Administration, pp. 43-4.

覺ノ觀點ヨリセバ、母國人ノ數比較的少ナルヨリ土民等ハ容易ニ反抗的ノ態度ニ出ヅルコトヲ得ルト、資本家及ビ勞働者トシテノ母子兩國民ノ植民地ニ於ケル地位ノ隔絶餘リニ顯著ナルヨリ、多少教育ヲ受クル時ハ兩者ノ間ニ不斷ノ衝突ヲ惹起スノ危險移住植民地ニ於ケルヨリモ大ナルモノアルヲ以テナリ、印度及ビ亞弗利加ニ於ケル植民地ノ白人ニトリテ統治難ヲ感ゼシムル理由ノ一ハ又茲ニ存ス。若シ夫レ植民地ノ土民ノ如キハ最初ヨリ之レヲ愚ナラシムルノ主義ニ依リ、全然彼等ニ教育ヲ施スコトナクンバ即チ休ムモ、然ラザル以上ハ教育ノ結果早晚民族の自覺ヲ促スニ至ルハ免ルベカラザル所ナルヲ以テ、斯カル事情ノ下ニ在リテハ放資植民地ノ將來ハ寧ロ一大疑問ト稱セザルヲ得ズ、假令植民地ノ統治ニ關シテハ巧妙ナル技能ヲ有スルモ、若シ其ノ國人ニシテ植民地ニ永住スルノ能力ヲ有セザル時ハ、土民間ニ於ケル民族的自覺ノ發展ニ伴ヒ漸次母國ノ統治策ヲ左右セラルルニ至ルハ明ラカニシテ、放資的植民モ永住的植民ノ後援ヲ有セザル時ハ、其ノ將來ハ極メテ不安ノ狀態ニ陷ルヲ免レズ、永住シ得ベカラザル所ニハ眞ノ植民地ナルモノ存セズ』(註)トハ云々ヤーどん氏ノ言明セル所ナルモ、現今歐洲諸國民ハ彼等ノ健康及ビ體質上到底永住ヲ許サザル地方ヲ植民地トシテ領有シツ、ア

(註) Egerton, Origin and Growth of the English Colonies, 9.

ルガ故ニ、氏ノ言ハ少クトモ現在ニ於テハ事實ニ反スルモノノ如シト雖ドモ、植民地ニ於ケル土民ノ知識ノ啓發ト共ニ民族的自覺ノ益々發達スルニ從ヒ、單純ナル放資植民地ハ將來遂ニ母國ヨリ分離スルニ至ルカ、或ハ永住的能力ヲ有セル他國民ノ爲メニ蠶食セラルルカ、然ラズンバ母國ニ對スル不斷ノ衝突ニ因リ、其ノ名ヲ有スルモ實ヲ失ヘル植民地ト化シ去ルニ至ルベキハ自然ノ勢ナルヲ以テ、斯カル見地ヨリセバ氏ノ言亦大ニ味フ可キモノナシトセズ。

由來白人ハ異域ノ探險及ビ征服ニ長ズルモ、其ノ體質上氣候惡疫等ノ障礙ニ對スル抵抗力薄弱ナルコトハ從來多數ノ學者ノ認ムル所ニシテ^(註)其ノ結果母國人ハ植民地ニ於テハ單ニ少數ノ治者又ハ企業者ノ地位ニ立チ、土民ヲ使役シテ富源ノ開發ニ任ゼシムルノ主義ヲ探リ、此ノ如クニシテ母子兩國間ノ關係ヲ永久ニ持續セシメンコトニ努メタリト雖ドモ、斯カル希望ハ今ヤ植民地土民ノ民族的自覺ニ因リ漸次水泡ニ歸セントスルノ傾キアリ、故ニ將來ノ植民國タラントスル者ハ少クトモ

- (一) 植民地ノ事業ニ放下ス可キ資本ヲ有スルコト、
(二) 植民地ニ移住シ得ベキ人口ノ餘裕ヲ有スルコト、

(註) Köbner, Einführung in die Kolonialpolitik, S. 17.
Zimmermann, Kolonialpolitik, S. 6.
Lucas, Introduction to a Hist. Geog. of the British Colonies, pp. 15-17.
Egerton, Origin and Growth of the E. C., pp. 10-11.
Reinsch, C. G., pp. 33-34.
Caldecott, English Colonization and Empire, p. 190.

(三) 國民ノ植民地ニ於ケル永住的能力ヲ有スルコト、

ノ三條件ヲ必要トシ、是等ノ要件ヲ具備セル國民ニシテ初メテ植民事業ヲ完成セシムルコトヲ得ベシ。

人類ノ本能性ニ基ヅケル民族的ノ自覺ハ、土民ノ知識及ビ思想ノ進歩、換言セバ教育及ビ宗教的思想ノ刺戟ニ依リテ、將來益々發展スルニ至ルベキハ疑ヲ容レザルヲ以テ、之レニ處スベキ母國ノ方針トシテハ、既ニ述ベタルガ如ク一方ニ於テハ土民ノ教育方法ニ深く注意スルト共ニ、他方ニ於テハ彼等ノ生活上ニ直接壓迫ヲ感ゼシメザル程度ニ於テ、成ルベク多クノ母國人ヲ植民地ニ移住セシムルノ主義ニ出ヅルヲ要ス、蓋シ母國人ノ移住ノ増加ハ密ニ植民地ノ富源ノ開發上極メテ緊要ナルノミナラズ、之レニ依リテ間接ニ土民ノ自覺ニ基ヅク輕舉妄動ヲ抑制セシムルコトヲ得ベク、若シ又是等ノ移住者ニシテ漸次拔ク可カラザル勢力ヲ植民地ニ扶植スルニ至ル時ハ、假令土民間ニ民族的ノ自覺ヲ生ズルモ、獨立運動ヲ企ツルガ如キハ彼等ニトリテ却テ不利ナルベキヲ悟ルニ至リ、結局土民ノ自覺心ヲ轉ジテ植民地ノ經濟的發展ニ專ラナラシムルコトヲ得ベキヲ以テナリ。

五

以上吾人ハ一般的見地ヨリ本問題ヲ論述シタリト雖ドモ、蹴テ之レヲ我が植民

地ニ就キテ考察スルニ、樺太及ビ關東州ハ姑ク之レヲ措キ臺灣及ビ朝鮮ニ於テハ、土民ノ知識未ダ甚ダ幼稚ナルニ拘ハラズ、從來屢々母國ニ對シテ反抗的ノ態度ニ出デタルガ如キハ全ク別箇ノ理由ニ基ツケルモノニシテ、之レヲ以テ彼ノ印度亞弗利加又ハ比律賓等ニ於ケル民族の自覺ニ基因セル獨立運動ト同視ス可キニ非ラズ。我ガ植民地ニ於ケル過去ノ陰謀事件ノ如キハ、眞ニ民族の自覺ノ下ニ土民ノ結合セルニ因ルモノニ非ラズシテ、政治的熱狂心ニ富メル一部亡民ノ煽動ニ因リ、現ニ生活上ノ壓迫ニ苦シミツツアル愚民等ノ盲動的行爲ニ出デタルニ過ギズ、故ニ之レヲ以テ現今先進植民國ニ於ケル重大問題ノ一タル、植民地土民ノ自覺ニ基ヅク獨立運動ニ比センハ未ダシ然レドモ既ニ民族の自覺ハ人類自然ノ本能性ニ出デ、又土民ノ教育ハ我ガ國ニ於テモ植民地ノ開發上寸時モ之レヲ忽カセニス可カフザル事情存スル以上ハ、早晚是等兩者ノ相接觸スル所、茲ニ新ナル一種ノ革進的運動ヲ生ズルニ至ルベキハ免ル能ハザル所ニシテ、是等ノ運動ヲシテ所謂植民地土民ノ自覺ニ基ヅク、母國ニ對スル獨立運動タラシムルニ至ルカ、或ハ然ラズシテ母國ト協力シテ植民地ノ富源ヲ開發スベキ產業上ノ革進運動タラシムルニ至ルカハ、一ニ懸リテ現在及ビ將來ニ於ケル我ガ植民地ノ土民ニ對スル教育政策ノ如何、及ビ是等ノ地方ニ於ケル健實ナル母國民ノ發展力如何ニ在リテ存スト言ハザル可カラズ。